第 9 章

対象事業に係る環境影響の総合的な評価

第 9 章　対象事業に係る環境影響の総合的な評価

平成 28 年度における事後調査の結果と、環境影響評価結果との比較検討の結果は、主に以下のとおりです。

ウミガメ類の工事海域への来遊（接近）状況としては、調査期間を通じて、調査範囲として設定した「工事海域」においてウミガメ類は確認されませんでした。

サンゴ類の生息被度、生育状況、食害生物の出現状況等について、工事前として実施した本調査結果と過去の調査結果を比較した結果、分布範囲や被度については場所によって変化がみられたものの、面積に大きな変化はみられませんでした。

海藻草類の生育被度、生育状況については、海草類の調査が海草の繁茂期である夏季に実施しておらず衰退期の冬季のみの結果であることから、一様の比較はできませんでした。また、ホンダワラ藻場では全域で分布状況に変化がみられましたが、調査期間が工事開始前にあたるため、事業実施の影響は受けていないと考えられました。

ジュゴンの工事海域への来遊（接近）状況については、調査期間を通じて、調査範囲として設定した「警戒監視区域」、並びに大浦湾全域及び嘉陽地先西側海域を含む海域においてジュゴンは確認されませんでした。また、嘉陽周辺海域における海草藻場の利用状況について、調査期間を通じて食跡数は、事業実施前の変動範囲内でした。ヘリコプターからの監視による生息海域における生息状況では、調査期間を通じて確認されたジュゴン（個体 A、B）が、これまでの行動範囲から外れた状態はみられませんでした。なお、個体 C については、調査期間中に確認されませんでした。

海域生物（トカゲハゼ）の生息状況については、平成 28 年度冬季調査の結果において大浦湾奥部で成魚が確認されており、トカゲハゼの生息状況に変化はみられませんでした。

陸域動物（陸生動物）における鳥類の繁殖状況査では、平成 28 年度は春季から秋季に調査ができていないため、営巣状況について比較することはできませんでした。

陸域生態系（基盤環境、生態系の機能と構造）における動物相の状況では、確認種数は年度毎に変動はあるものの、工事中の確認種数は概ね工事前の変動幅の範囲内に収まるものと考えられます。平成 28 年度は春季から秋季に調査ができていないため、確認種数について比較することはできませんでした。なお、平成 28 年度冬季の調査結果は、過年度の冬季調査結果と比較すると、大きな変化はないものと考えられました。

陸域生態系（地域を特徴づける注目種）におけるミサゴの生息・繁殖状況としては、営巣や交尾といった繁殖を示唆する行動については、工事前・工事中ともに

確認されていませんが、採餌範囲については、工事中は工事前に比べ概ね同様な傾向にありました。シロチドリの生息・繁殖状況としては、平成 28 年度は工事前及び工事中（平成 26 年度夏季～平成 27 年度冬季）と比べて、1 季あたりの確認個体数は多くなっていましたが、繁殖状況については春季から秋季に調査ができていないため、比較することはできませんでした。

以上のことから、事業の実施に伴う影響を最小限に留めることができ、環境影響評価書に示した環境保全措置を実施することにより、環境影響を低減できていると考えられ、第 8 章に示したとおり、新たな環境保全措置を講じる必要はないと考えました。

よって、今後も引き続き事後調査を実施し、本事業による環境変化、環境影響の把握に努めていくこととします。